

序

「子どもたちの生活環境」に対する認識概念

——ダスグプタの<peacelessness>とガルトウングの<暴力>論を手がかりに——

寺本 実

要旨：

本稿では、寺本2025で示した筆者の関心にひきつけ、スガタ・ダスグプタが生み出した<peacelessness>という認識概念を手がかりに、子どもたちを取り巻く現在の状況を<ピースレスネス>と捉えた。そしてヨハン・ガルトウングの<暴力>論に学び、<ピースレスネス>下にある子どもの状況を「取り巻く諸条件により、子ども(非障害児、障害児)の肉体的・精神的実現が、潜在的に可能な実現を下まわる時、そこには子どもたちに対する暴力(問題)が存在する」と認識することの重要性を主張する。こう捉えることにより、子どもに関わる問題は、社会開発や教育の問題としてだけでなく、<平和>について考える取り組みの下に位置付けることが可能になり、より不断の関心の下に置かれることになる。

キーワード：子どもの生活環境、スガタ・ダスグプタ、ヨハン・ガルトウング、平和

大人はいつも子どもたちのために働いてきたはずだった。しかし、グローバルな感染症禍、気候変動と頻発する自然災害、環境汚染、国際的武力衝突の発生とその長期化、急速な情報技術の発展、交通事故の多発、少子高齢化の進行、過度な競争など、私たちが生きる世界は、休む間の乏しい、絶え間ない緊張下にある。発展途上国を中心とする貧困問題も依然として大きな課題の1つになっている¹。こうしたなか、最も弱い立場に置かれているのは、取り巻く状況に否応なしに適応を迫られる子ども²たちではないか³。以上のような認識の下、本稿ではスガタ・ダスグプタ(後出)、ヨハン・ガルトウング(後出)の議論に学びながら、そうした状況の概念化を試みる。

なお本稿は、本研究会各委員の個々の考え方を代表するものではなく、その取り組みを拘束するものでもない。またアジア経済研究所(IDE-JETRO)の共通認識を示すものでもない。あらかじめご理解願いたい。

1. 子どもの生活環境を捉えるための概念

本節では、主に Dasgupta 1968、Galtung 1969、そしてこれらの論考について解説した多賀 1984 に学びつつ、上記した子どもたちの置かれた状況の概念化を試みる。

(1) 概念化——スガタ・ダスグプタの〈peacelessness〉を手がかりに——

筆者は、冒頭で記した子どもの状況を〈ピースレスネス(peacelessness)〉という言葉で捉えるのが相応しいと考える。これはインド出身の平和研究者スガタ・ダスグプタ(Sugata Dasgupta、生年不詳、以下ダスグプタ、)が Dasgupta 1968⁴で発語した〈peacelessness〉という認識概念に学んだものである。当時、ダスグプタはマハトマ・ガンディー(Mahatma Gandhi、1869–1948)所縁の Sarva Seva Sangh(All India Sarvodaya Mandal)⁵によって設立されたガンディー研究所(Gandhian Institute of Studies)⁶のジョイントディレクター(Joint Director)⁷、ソーシャルワークの教授を務めていた。なお、Dasgupta 1968 は、「ベンガル州のゼネスト(Bengal Bundh)⁸」、「チャンバル渓谷における武装盗賊問題(Dacoit Problem in Chambal Valley)⁹」、「ルールケラでの暴動(Riots in Rourlela)¹⁰」に関するガンディー研究所の下で実施された事例研究を通したファインディングに基づく論考である(Dasgupta 1968:19)。

それでは、以下でダスグプタの〈peacelessness〉概念について見ていきたい。ダスグプタは、西洋では〈平和〉について考える際、戦争がない状態を基本的に〈平和〉と捉え、戦争の回避や武力衝突につながる緊張の緩和に主たる関心を向けてきたとする(Dasgupta 1968:19)。これに対し、「東洋(The East、特にインドを念頭に置いている)では、戦争はまれであったにもかかわらず、同時に広範な人々にとってまったく平和も存在しなかった」(多賀 1984:159、Dasgupta 1968:21)と考えた。そして、「東洋では経済的・心理的な貧困と、経済・制度の枠組みに根強く残る伝統的な固定観念が、常に人々の生活を手に負えない、野蛮で、短い peaceless の状態にしてきた」(多賀 1984:159、Dasgupta 1968:20-21)と捉え、戦争下ではないものの「平和」とは言い難いこうした状況を〈peacelessness〉と名付けた。

冒頭で筆者は、現在の子どもたちを取り巻く生活環境を以下のように捉えた。

「グローバルな感染症禍、気候変動と頻発する自然災害、環境汚染、国際的武力衝突の発生とその長期化、急速な情報技術の発展、交通事故の多発、少子高齢化の進行、過度な競争など、私たちが生きる世界は、休む間の乏しい、絶え間ない緊張下にある。発展途上国を中心とする貧困

問題も依然として大きな課題の1つになっている。子どもたちはこうした取り巻く状況に否応なしに適応を迫られており、最も弱い立場に置かれている。ダスグプタは、〈peacelessness〉と彼が名付けた苦しみ・喪失は、飢餓、貧困、疾病、不潔の産物であり、貧困は〈peacelessness〉の母だとしている(Dasgupta 1968:21)¹¹。しかし、筆者は貧困問題を重視しつつも、飢餓や貧困に直面していない子どもたちも含めて念頭においている。時代背景も異なり、ダスグプタの認識は筆者が考えている状況とそのまま重なるわけではない¹²。あくまでも筆者は、筆者自身の関心に引きつけてダスグプタの捉え方から学んでいる。こうしたスタンスをとることによって、ダスグプタが述べる文脈に全て従うことからの自由を確保する。その上で、多くの子どもたちが必ずしも〈平和〉¹³に暮らしているとは言い難い上記のような状況を、筆者は〈ピースレスネス〉という用語で捉える。

(2) 概念化——ヨハン・ガルトゥングの〈暴力〉論を手がかりに——

次に、ヨハン・ガルトゥング(Johan Galtung、1930-2024年、以下ガルトゥング)の〈暴力〉論から学ぶ。ガルトゥングは社会学、数学を修めたノルウェー出身の著名な平和研究者である。ガルトゥングは、ダスグプタの論考からヒントを得て、独自の〈暴力〉論を発想したとの指摘がある(多賀 1984:158)。「平和とは暴力の不在である、という命題から出発」(多賀 1984:160、Galtung 1969:167)したガルトゥングは、「人がなんらかの影響を受けたために、現実の身体的・精神的表現が、潜在的に可能な実現¹⁴を下まわる時、そこには暴力が存在する」(多賀 1984:160、Galtung 1969:168)と考えた。〈暴力〉を「潜在的可能性と現実との差異、あり得たかもしれないことと現実の差異を生み出している原因」(多賀 1984:160、Galtung 1969:168)として捉えたのである¹⁵。もし〈暴力〉を直接的、物理的な側面だけから捉えるならば、受け入れ難い社会秩序さえも〈平和〉と位置付けることができってしまう(Galtung 1969:168)。上記のように定義することで、貧困や抑圧下で苦しむ人々の状況を座視することなく、平和研究の射程内に位置付けることにガルトゥングは成功した(多賀 1984:160)¹⁶。

後にガルトゥングは、〈文化的暴力(cultural violence)〉に関する研究(Galtung 1990)で、〈文化的暴力〉を「〈直接的暴力(direct violence)〉¹⁷や〈構造的暴力(structural violence)〉¹⁸を正当化し、それらを『当然のもの』として扱わせる文化的諸側面¹⁹」と捉えた。そして〈直接的暴力〉、〈構造的暴力〉、そして〈文化的暴力〉が互いに支え合う構造を〈暴力の三角形(violence triangle)〉と呼んだ(Galtung 1990:294-295)。直接的暴力・構造的暴力だけでなく、例えば子どもに対する体罰や暴力、女性に対する差別を正当化するような文化的諸側面についても注意を向けるべきとの認識である。

ここでは、本稿の関心にひきつけて、ガルトゥングの体系化された〈暴力〉論の基礎を構成する部分を手がかりとして、〈ピースレスネス〉下にある子どもの状況を捉える際、ガルトゥングに学んだ以下の認識、視角に基づいて状況を捉えることの重要性を指摘する。

「取り巻く諸条件により、子どもたち(非障害児、障害児)の肉体的・精神的実現が、潜在的に可能な実現を下まわる時、そこには子どもたちに対する<暴力>が存在する」。

ここで<暴力>という言葉が妥当でないならば、それを「問題」に置き換えても差し支えない。こうした認識、視角に基づいて現在を生きる子どもたちをめぐる問題について考えることにより、子どもに関わる問題を社会開発や教育の問題のみならず、「平和」について考える取り組みの下に位置付けることが可能になると考えられる。

(3) 本稿が提示する認識概念

ここでは、1. (1). 1(2)で記したことをまとめておきたい。

筆者は、現在の子どもたちを取り巻く生活環境について、以下のような認識を持っており、ダスグプタの議論を手がかりにして、こうした状況を<ピースレスネス>と名付ける。

「グローバルな新型コロナ感染症禍、気候変動と頻発する自然災害、環境汚染、国際的武力衝突の発生とその長期化、急速な情報科学技術の発展、交通事故の多発、少子高齢化の進行、過度な競争など、私たちが生きる世界は、休む間の乏しい、絶え間ない緊張下にある。発展途上国を中心とする貧困問題も依然として残された大きな課題の1つになっている。こうした取り巻く状況に子どもたちは否応なしに適応を迫られており、最も弱い立場に置かれている」。

そして、<平和>は<暴力>の不在であることを前提に、<ピースレスネス>下で生きる子どもたちの状況を考察する上で、ガルトゥングに学んだ以下のような認識が大切だと考える。

「取り巻く諸条件により、子どもたち(非障害児、障害児)の肉体的・精神的実現が、潜在的に可能な実現を下まわる時、そこには子どもたちに対する<暴力>(問題)が存在する」。

3. 本調査研究報告書の構成

本調査研究報告書の構成は、以下の通りである。

第1章は、中村論考(「インドの子どもたちの生活環境——児童労働撤廃政策の変遷を中心に——」)である。中村論考は、インドで児童労働が減少している状況を示した後、インド政府による児童労働撤廃政策への取り組みとその経緯を時系列に跡づける。インド政府は、国際労働機関(ILO)と協力して児童労働撤廃に向けた国内法の整備、普及に努めた。そうした取り組みとともに、タミルナドゥ州シバカシ市の児童労働をめぐるインド最高裁判判決(子どもを雇用する工場主に対し、経済的制裁を科す)が児童労働削減を強く後押ししたことを指摘する。また、インド政府は、児童労働撤廃策を推進するだけでなく、子どもを労働ではなく教育に向かわせるために学校教育の普及に力を注いだことに注目する。そして最後に、ネットの普及がインドの児童労働に新たな問題を生じさせていることに言及している。

第2章の森論考(フィリピンの障害児の置かれた状況と行政やNGOによる支援——新型コロナ期間中及びその後に注目して——)は、開発研究における発展途上国の子どもの権利保障という視角に基づき、フィリピンを対象にして考察を展開している。発展途上国における子どもの権利保障は国際開発研究の中核課題になりつつあり、障害児についても国連児童基金(UNICEF)から国際比較可能な障害児の実態について調査したデータベースが発表されている。第2章で考察対象とするフィリピンは、このデータベースには加わっていない。代わりに、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)蔓延期間に同国のUNICEF支部とフィリピン政府機関により障害児を持つ家庭に対する緊急電話調査が実施された。フィリピンでは、子ども(障害児・非障害児)支援に関する法的、制度的な枠組みは整えられているが、実施局面で課題を抱えているとの認識は非政府組織(NGO)間で共有されてきている。そして、ネットワークや人工知能(AI)の発展に伴い、国境を超えたネットワーク上の性的虐待である「オンライン性的搾取・暴力」(OSEA)が近年新しく出てきており、その被害者に障害児も含まれていることを指摘している。

第3章の寺本論考(現在のベトナムの子どもたちをめぐる状況)では、現地資料の読み解き、分析に基づいて、現在のベトナムの子どもたちを取り巻く状況を把握しようと試みている。ベトナムでは、「2030年までに上位中所得レベル、現代的な工業を有する発展途上国となり、2045年までに高所得の先進国になる」との目標実現に向けて、取り組みが続けられている。右肩上がりの経済成長と現代化の進展を背景として、乳幼児の健康状況の改善、教育レベルの向上、教育機会の多様化、教育施設の改善といった健康面、教育面で積極的な変化が見られる。その一方、日本を含めた各国と同様にベトナムも多くの課題に直面している。例えば、少子化、二重負荷の問題、インターネットとりわけ巨大プラットフォームやソーシャルネットワークの浸透が子どもにもたらす影響、非行(暴力や犯罪の若年化)、子どもに対する暴力や虐待といった問題をベトナムも抱えていることを、指摘している。

おわりに

冒頭で記したが、本稿は本研究会各委員の個々の考え方を代表するものではなく、その取り組みを拘束するものではない。またアジア経済研究所(IDE-JETRO)の共通認識を示すものでもない。

本稿では、2025寺本を受け、そこで示した現在の子どもたちを取り巻く生活環境に対する認識を再検討し、「過度の競争」や所与のものとして記していなかった「貧困問題」を明記し、その概念化を行った²⁰。

筆者はあくまでもベトナム地域研究に従事する者である。また、本研究会で各委員はそれぞれインド、フィリピン、ベトナムを担当しており、本研究会はアジアの開発途上国の子どもたちを調査研究の対象としている。

しかしながら、今回概念化の作業のために学び、手がかりとしたダスグプタ、ガルトウングの議論は、必ずしも対象とする国家・地域を限定するものではない。したがって、本研究会ではアジアの開発途上国の子どもたちを対象として調査研究を進めているが、ダスグプタ、ガルトウングの概念に学び、手がかりとして考えた上述の概念・認識は、対象とする国家・地域を選ぶものではないと考えられる。

子どもの問題が重要ではないと位置付ける政府は恐らく存在しないであろう。子どもの問題は、各国政府それぞれの発展戦略において最重要課題の1つとしてこれまでも位置付けられてきたに違いない。さまざまな国際機関においても同様だと考えられる。しかし、その定めた「文言」の実行の程度は、そのニーズの潜在的実現可能性と比較して、はたしてこれまで十分な水準を達成してきたであろうか。今回の取り組みが、〈ピースレスネス〉下に置かれた子どもたちの状況改善に向けた問題の可視化の一助となるならば、望外の喜びである。

【付記】

ダスグプタ、ガルトウングの考え方を理解する上で、多賀1984に多くを学んだ。本稿を終えるあたり、両先生と多賀先生に記して感謝を申し上げたい。

【参考文献】

- 阿部彩 2008 『子どもの貧困——日本の不公平を考える——』 岩波書店。
—— 2014 『子どもの貧困Ⅱ——解決策を考える——』 岩波書店。
多賀秀敏 [1984] 「J・ガルトウングの世界分析——構造的暴力と帝国主義論——」、白鳥令・曾根泰教編『現代世界の民主主義理論』新評論、153-181頁。
寺本実 2025 「序『アジアの子どもたちの生活環境』を考察するにあたって」、寺本編『アジアの子どもたちの生活環境——基礎理論研究会成果報告書——』アジア経済研究所、1-9頁。
Galtung, Johan 1969. Violence, Peace, and Peace Research. *Journal of Peace Research*, Vol.6, No.3, pp.167-191.
Galtung, Johan 1990. Cultural Violence. *Journal of Peace Research*, Vol.27, No.3, pp.291-305.
Dasgupta, Sugata 1968. Peacelessness and Maldevelopment: A new theme for peace research in developing countries. *Proceedings of the International Peace Research Association Second Conference*. Van Gorcum&Comp.N.V., Assen, pp. 19-42.

<インターネット>

Sarva Seva Sangh ウェブサイト (<https://sarvasevasangh.in/sarva-seva-sangh/>)。

Pal, Chandan 2024. Another Historical Conspiracy Demolishing Gandhian Institute of Studies

(<https://www.frontierweekly.com/articles/vol-56/56-9/56-9->

text=Sarva%20Seva%20Sangh%20(All%20India,the%20first%20President%20of%20India).

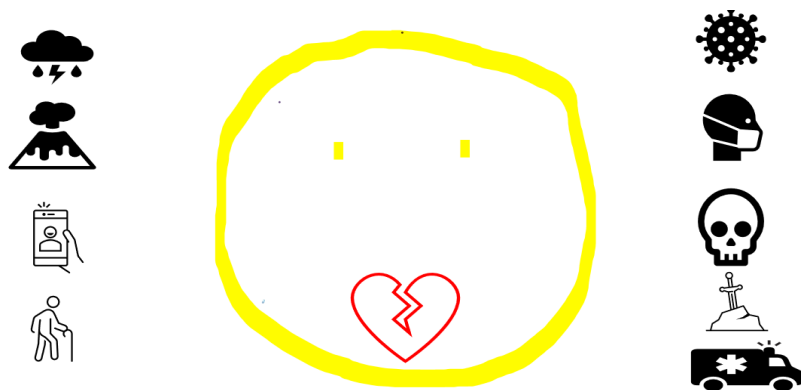
〔注〕

¹ 貧困問題は、発展途上国だけの問題ではないことを筆者も認識している。経済協力開発機構(OECD)が2006年7月に出した対日経済審査報告書において日本の相対的貧困率はOECD諸国の中でアメリカについて2位であった(阿部2008:ii)。先駆的にこの問題に取り組んできた阿部は、日本の子どもの貧困、大人になっても続く「不利」について明らかにしている。例えば阿部は、母子世帯の子ども、子どもの貧困と学歴社会、子どもにとっての「必需品」などの多角的な観点から、先行研究のファインディングを含む各種統計データに基づく根拠を示しつつ、日本の子どもの貧困と、虐待や非行といった貧困の影響によって引き起こされる可能性がある様々な問題について指摘している(阿部2008)。また阿部は、続く仕事において2013年に日本の国会で「子どもの貧困対策法」が成立したのを受けて、現金給付、現物給付、教育支援などの検討を行うとともに提言を行っている(阿部2014)。

² もちろん非障害児、障害児を含む。以下同様。

³ 2025 寺本では、以下の図1を示し、現在の子どもたちを取り巻く状況を以下のように捉えていた。「グローバルな新型コロナウイルス感染症禍、気候変動と頻発する自然災害、国際的武力衝突の発生とその長期化、急速な情報科学技術の発展、交通事故の多発、少子高齢化の進行など、私たちが生きる世界は、休む間の乏しい、絶え間ない緊張下にある。こうしたなか、最も弱い立場に置かれているのは、否応なしに適応を迫られる子どもたちではないか」(寺本2025:3)。本稿では、上記した内容を再検討し、受験戦争や就職活動に際する「過度の競争」や、所与のものとして考えていたために記していなかった「貧困問題」を付け加えている。

図1 現在の子どもを取り巻く状況



(出所) 寺本(2025:3)。

⁴ Dasgupta, Sugata 1967. *Peacelessness and Maldevelopment: A new theme for peace research in developing countries.* *International Peace Research Association* が再掲載されたものと思われる。

⁵ サルヴォーダヤ(Sarvodaya、 सर्वोदय=万人の幸福)の哲学に基づくスワラージ(Swaraj、 स्वराज=自己統治)という1948年に暗殺されたガンディーの理想を実現するため、ヴィノバ・バーヴェ(Vinobaji)、キショルラール・マシュルワラー(Kishorilaji Mashruwala)、J.C. クマラッパ(J.C. Kumarappa)、カカサーヘブ・カレールカル(Acharya Kakasaheb Kalelkar)、シュリクリシュナダス・ジャージュ(Shrikrishnadasji Jaju)、アーリヤナヤカム夫妻(Aryanayakam Couple)、ジャヤプラカーシュ・ナーラーヤン(Jayaprakash Narayan)らガンディーの協力者たちによって1948年に設立された民間組織(<https://sarvasevasangh.in/sarva-seva-sangh/>)。本稿執筆現在も活動を続けている模様である。

⁶ ガンディー研究所は、2023年に使用地の所有権をめぐる問題に巻き込まれ、廃止に追い込まれたと伝えられている(Pal 2024)。

⁷ 所長(Director)の仕事を支える副所長相当の職位ではないかと推測される。

⁸ ダスグプタによる事例研究(Dasgupta 1968:24-28)。

⁹ R.P.Gargによる事例研究(Dasgupta 1968:28-33)。

¹⁰ B.B.Chatterjee 他による事例研究(Dasgupta 1968:33-40)。

¹¹ 別の個所で彼は<peacelessness>を「貧困だけでなく、不良開発(maldevelopment)の産物」(Dasgupta 1968:22)と述べ、不良開発も<peacelessness>を生み出す要因として問題視している。そして大国がしばしば発展途上国における開発の価値観・理念(ethos)を規定するなど、大国間の競争が発展途上国の国内状況をさらに悪化させることへの憂慮を示している(Dasgupta 1968:22)。ダスグプタのこの論考が掲載された1960年代後半はベトナム戦争の最中であった。ベトナム戦争はベトナムの人々にとっては民族独立と南北統一をかけた戦いであった。社会主義体制をとるソ連や中国などの支援を受けるベトナム民主共和国(北ベトナム)と資本主義体制をとるアメリカを中心とする西側陣営の支援を受けたベトナム共和国(南ベトナム)の間の戦争である。このように、ダスグプタが同論考を執筆した当時の国際情勢は、資本主義体制をとるアメリカ・西欧を中心とする西側陣営と、社会主義体制をとるソ連・東欧諸国および中国が複雑な緊張をはらみながら対峙する東西冷戦の時期に当たっていた。上記したダスグプタの憂慮は、こうした点を念頭においたものだと考えられる。東西冷戦は、ドイツのベルリンの壁が崩壊し、ソ連が解体した1989～1991年に終結した。しかしながら、2019年末～2020年代前半の新型コロナウイルス感染症(COVID-19)禍、2024年2月に起きたロシアによるウクライナ侵攻以降、その東西冷戦後の体制は大きく軋み始めている。戦地から離れた異国で暮らす人々でさえ、テレビをはじめとするメディアを通して、本当の戦争や武力の使用を目の当たりにする時代状況の中で、現在の子どもたちは暮らしている。1つ追記させていただくと、これは新型コロナウイルス感染症禍発生より前の時期からのことであるが、朝鮮民主主義共和国(北朝鮮)が発射する弾道ミサイルの飛来に備えた

避難指示の掲示が、千葉市内の中学校前に設置された掲示板に貼られているのを筆者は確認した。東西冷戦期に学生時代を過ごした筆者は、武器飛来の際の避難指示が学校で掲示されているのを見た記憶がない。

¹² 時代背景の違いについては、注11で記した。

¹³ 後述するが、ここではガルトゥングの考え方に学び、〈暴力〉の不在を〈平和〉と捉えている。

¹⁴ 〈潜在的実現可能性 (potential realization)〉について、ガルトゥングは、特に人間生活の身体的側面から離れ、精神的側面について考える際の問題性を認めている。身体的側面については比較的合意が得られやすいと考えている。ここでガルトゥングが念頭においているのは、宗教のように個人の信仰に関わる事項ではなく、例えば識字率のように実現されるべき価値がかなり広く合意されている事項である (Galtung 1969:169)。

¹⁵ ガルトゥングの定義にしたがった〈暴力〉の例として、ガルトゥングは例えば以下のような例を挙げている。もし18世紀に人が結核で亡くなったとしても〈暴力〉が存在すると理解することは難しい。(当時の医療状況から考えれば) 不可避であったかもしれないからである。しかし、今日(こんにち)の世界の医療資源下において、もし結核で人が亡くなったならば、定義にしたがって、そこには〈暴力〉が存在する (Galtung 1969:168)。また、新石器時代において寿命が30歳である場合、〈暴力〉が存在すると捉えられることはできないが、今日寿命が30歳であるならば、定義にしたがって、そこには〈暴力〉が存在する (Galtung 1969:169)。他方、直接的な暴力がふるわれる戦争に関連しては、戦争が戦われる際には、人を殺害したり、傷つけたりするという直接的暴力が存在する。その行為は被害者の現実の身体的実現を潜在的に可能であった身体的実現よりも引き下げていると説明している (Galtung 1969:169)。間接的な暴力については、現実を潜在的可能性に近づけるための建設的な努力から、洞察・資源が別の方向に流されてしまう場合には、そこに間接的な暴力が存在すると述べている (Galtung 1969:169)。

¹⁶ ガルトゥングは、主体が存在する〈個人に対する暴力 (personal violence)〉がない状態を〈消極的平和 (negative peace)〉と名付けた。そして主体が存在しない〈構造的暴力 (structural violence)〉がない状態を〈積極的平和 (positive peace)〉と位置付けている (多賀 1984:164、Galtung 1969:183)。

¹⁷ 〈直接的暴力〉とは、殺害する、苦痛を与える、非社会化する、追放するなど、暴力をふるう行為者が存在し、目に見える暴力を指す (Galtung 1969:173、Galtung 1990 : 292、多賀 1984:162)。

¹⁸ 〈構造的暴力〉とは、搾取する、分割化する、周辺化する、断片化するなど、〈直接的暴力〉におけるような行為者が存在せず、沈黙を守り、姿を見せない、目に見えない暴力を指す。ガルトゥングは、自由な流れを妨げ、すべての種類の渦、流れの乱れを生じさせる、小川の中の巨大な岩のように顕在化する、と〈構造的暴力〉について表現している (Galtung 1969:173、Galtung 1990 : 292、多賀 1984:162)。

¹⁹ Galtung 1990:291.

²⁰ 注2を参照のこと。